

〈地域経済レポート〉

読書会による地域コミュニティの再生
ー読書会「本のカフェ」の事例から

若 林 隆 久

The revitalization of regional communities through book clubs:
A case study of “Hon no Cafe”

Takahisa Wakabayashi

Summary

In the settings of growing individualism and anxieties about the destabilized society, people have been interested in and raised hope in communities. On the other side, people raise an alarm over the collapse and decline of communities here and abroad. Therefore, it is significant how we revitalize communities. As traditional communities based on neighborhood and blood ties have declined, the new ways to revitalize communities are required.

In this paper, we focus on cafes and book clubs which held in cafes as the third place (Oldenburg, 1989) revitalizing communities and report the case study of “Hon no Cafe.” “Hon no Cafe” is a book club held in Sapporo and Tokyo. First, we present the outline of “Hon no Cafe.” Then, we briefly picture the 31st party at Tokyo and the 32nd party at Sapporo, which we participated in. Finally, we point out future agendas for events and communities.

I はじめに

個人主義の進展や不安定化する社会に対する不安からコミュニティへの関心や期待が高まっている（広井，2009；伊豫谷・吉原・齋藤，2013）。一方で，国内外を問わずにコミュニティの崩壊や衰退には警鐘がならされており，いかにコミュニティを再生するかがひとつの課題となっている（Putnam，2000；山崎，

2012）。地縁や血縁に基づいた伝統的なコミュニティの力が弱まる中，新たな方法でコミュニティを活性化させる必要がある。

そうした背景もあって，コミュニティを活気づけるためのサードプレイス（Oldenburg，1989）に注目が集まっている。Oldenburgは，第一の場所である家庭，第二の場所である職場に続く第三の場所（サードプレイス）として，コミュニティの中にあるインフォーマルな公

共生活の中核となる「とびきり居心地よい場所（great good place）」を取り上げ、その重要性を指摘した。サードプレイスを整備することで、コミュニティを再生することが期待される。

サードプレイスの例としては Oldenburg (1989) の原著の副題にもあるように様々な場所が挙げられるが、その代表的なものとしてカフェに着目したい。というのは、カフェという場所が世の中に幅広く普及しており、年齢を問わずに出入りできる場所だからである。とはいえ、カフェがあれば、それがそのまま Oldenburg のいうサードプレイスとなるわけではない。Oldenburg は、サードプレイスの特徴のひとつとして会話がなされることを挙げている。人のつながりを作りコミュニティを形成するためにはもっともな条件であるが、少なくとも日本ではカフェの中で活発に会話がされることはまれである¹⁾。そのため、カフェをサードプレイスとして機能させるためには、何らかの仕掛けやイベントが必要である。

そこで、本稿では、カフェで開かれる読書会である「本のカフェ」の事例を取り上げる。「本のカフェ」は、札幌および東京で開催されている読書会であり、比較的に参加者が固定されず新規の参加者が多い点と札幌および東京の2都市で開催されている点に特徴がある。本稿の目的は、これらの特徴を持つ「本のカフェ」の事例を紹介することを通じて、イベントとコミュニティに関して今後検討すべき論点を提示することである。

本稿の構成は以下の通りである。第Ⅱ節では、「本のカフェ」の概要を説明する。第Ⅲ節では、筆者が参加した札幌と東京それぞれの「本のカフェ」の活動の様子を紹介する。最後に、第Ⅳ節で、今後検討すべき課題を提示する。

Ⅱ 「本のカフェ」³⁾

1. 概要

「本のカフェ」は、作家・ライターである木村洋平氏が主宰する札幌および東京で開催されている読書会である。「本を読む 人とつながる」や「カフェで開かれる読書会」というコピーのもと、好きな本の紹介を通してゆるやかに交流する読書会である。第1回の「本のカフェ」は2013年12月7日に東京（恵比寿カフェカルフル）で、第2回の「本のカフェ」は2014年1月26日に札幌（円山りたる珈琲）で開催されている。カフェで友人たちと話していたところから自然と開催する運びとなったことが、開催の経緯である。2016年9月までに37回の「本のカフェ」が開催されており、ほぼ月に1回のペースで開催されている。37回のうち、6回が東京で開催され、残りの31回は札幌を中心に北海道で開催されている。

主宰の木村洋平氏は、哲学、西洋文化史、物語創作といったジャンルを主とした作家・ライターであり、訳書に『論理哲学論考』（ウィトゲンシュタイン著、2007年）、著書に『「論理哲学論考」対訳・注解書』（2010年）、『珈琲と吟遊詩人』（2011年）、『遊戯哲学博物誌』（2016年）がある。「本のカフェ」以外にも、古楽を始めとした音楽、哲学、本、芸術関連のイベントを主宰している。

2. 活動形式と特徴

「本のカフェ」は、開催場所を固定せず⁴⁾、土日を中心に2時間から3時間程度で開催されている。参加者はおおよそ8人から15人である。3人から4人の紹介者が1人15分ほどで本の紹介を行った後はフリータイムとなり参加者同士が交流する。紹介された本の話に限定されずに参加者同士が自由に交流で

きるフリータイムを長く取っていることから分かる通り、ゆるやかなつながりや気楽なムードを大切にしている読書会である。

本のジャンルは指定されておらず、実際に幅広い本が紹介されている。まれに作家やジャンルなどを対象とした特集が行われることもある。これまでに、児童文学やファンタジーといったジャンルを対象とした特集や、雑誌の『ビッグイシュー⁵⁾』や作家の池澤夏樹氏をテーマとした特集などが行われている。また、後半のフリータイムの時間を利用して書店や関連する場所をめぐるツアーが開催されることもある。

「本のカフェ」の特徴のひとつとしては、比較的に参加者が固定されず新規の参加者が多いことが挙げられる。特に活動の中心となっている札幌ではその傾向が強い。読書会に限らず多くのイベントでは参加者が固定的になることが多いが、「本のカフェ」では一定の常連がいるものの新規の参加者の割合が高いという風通しの良い状態が維持できている。その理由としては、開催場所を固定せず本のジャンルも指定しないということや東京出身の木村氏が直接の面識がない人たちを対象に一から立ち上げていったということがあられるかもしれない。

もうひとつの特徴としては、札幌および東京の2都市で開催されていることが挙げられる。札幌と東京では都市自体やそこに集まる人の特徴が異なることもあり、同じ主催者が同じような形式で読書会を開催してもその性格は異なるものとなる。そのため、都市やそこに集まる人の特徴によって、そこで開催されるイベントがどのような影響を受けるかを観察できる。東京では人口やそこに集まる人の多様性によってジャンルをかなり絞り込んだ読書会であっても成立させられる。それに対して、札幌では東京ほどの規模や多様性は

存在せず、読書会の数自体も少ない。ジャンルを絞り込むと対象が少なくなり参加者の固定化につながりうる。他方、読書会の数が少ないためひとつひとつの読書会の活動の存在感は大きくなり、読書会同士のネットワークができやすかったり、その対象地域で関心がある人には知られやすかったりする。「札幌」と「読書会」というキーワードでGoogle検索を行うと、「本のカフェ」はひとつ目の結果として出てくる⁶⁾。このことは、前述のように「本のカフェ」の新規参加者の割合が高いことの一因となっている。

3. オープン・ポリシーとセキュリティ・ポリシー

参加者が安心して参加し隔たりのない交流ができるために、「本のカフェ」ではオープン・ポリシー（2015年6月⁷⁾）と安心ルールというセキュリティ・ポリシー（2016年3月⁸⁾）を定めている。オープン・ポリシーでは、作品や文学とは関係ない文脈での政治・宗教・人種の問題を控えてもらうようにしている。セキュリティ・ポリシーでは、参加者同士のコミュニケーションや連絡先の交換および個人情報に関する方針を定めている。オープン・ポリシーとセキュリティ・ポリシーは、他のイベントでのトラブルを参考にして設定したという経緯があり、参加者や参加者同士の交流への配慮が伺える。

III 「本のカフェ」の活動の様子

続いて、筆者が参加した札幌と東京それぞれの「本のカフェ」の活動の様子を簡単に紹介する。ひとつ目は2016年4月10日に東京で実施された第31回の「本のカフェ」であり、ファンタジー特集として課題図書を指定して行われた「本のカフェ」であった。二

つ目の事例は2016年4月30日に札幌で実施された第32回の「本のカフェ」であり、こちらは特集などのない通常の「本のカフェ」であった。これら2つの事例を取り上げることで、札幌と東京という2か所の開催地で行われる「本のカフェ」と、通常通りに行われる「本のカフェ」と特集が行われる「本のカフェ」について紹介できる。⁹⁾

1. 第31回「本のカフェ」@東京

第31回の「本のカフェ」は、2016年4月10日(日)の13時から15時にかけて、東京の恵比寿にあるカフェ・カルフルで開催された(図1)。参加費は1,000円とワンドリンクで、参加者は11人であった。ファンタジー特集とされた第31回の「本のカフェ」では初の試みとして課題図書を指定しており、ロダーリの『羊飼いの指輪：ファンタジーの練習帳』(光文社古典新訳文庫、2011年)を題材に参加者でファンタジーについて話し合うという内容であった。『羊飼いの指輪』は20の短編を収めた本であり、それぞれの話に異なる3つの結末が用意されていて読者が好きな結末を選べるという点が特徴的である。参加者が順番に気になった短編を挙げていき、その短編を題材に話を展開させていくという形式であった。7つの短編が取り上げられ、用

意されている結末に関する好み、ロダーリが用意する結末の特徴、短編に登場するアイテム、ファンタジーというジャンル、などについて幅広く話し合われた。終了後には、近くの別のお店に移動して二次会が行われた。

2. 第32回「本のカフェ」@札幌

第32回の「本のカフェ」は、2016年4月30日(金)の14時から17時にかけて、札幌の「詩とパンと珈琲 モンクール」にて開催された(図2)。参加費は1,500円(パンとドリンク付き)で参加者は13人であり、うち7人が初参加であった。通常通りの「本のカフェ」であるため、参加者のうち3人が紹介者であり、残りの10人がオブザーバーであった。紹介された本は、それぞれ、『アダムス・ファミリー全集』(H・ケヴィン・ミゼロッキ 編、河出書房新社、2011年)、『これだけは知っておきたい「名画の常識」』(中村麗 著、小学館、2012年)と西洋絵画の画集、『羊と鋼の森』(宮下奈都 著、文藝春秋、2015年)であった。後半のフリータイムには、アルコールも含めたドリンクやモンクール特製のパンを交えながら、紹介された本の話題に限らない自由な交流が行われていた。

図1 第31回「本のカフェ」@カフェ・カルフル



図2 第32回「本のカフェ」@モンクール



IV おわりに

本稿では、札幌および東京で開催されている読書会である「本のカフェ」の事例を紹介した。事例から示唆される、イベントとコミュニティに関して今後検討すべき論点を提示して稿を閉じたい。

第一に、参加者の固定化を防ぎ新規の参加者を獲得するという点である。イベントやコミュニティが長きに渡って継続する場合、参加者が固定化されてしまう傾向にある。参加者が固定化してしまうことは必ずしも悪いことではないが、離脱による参加者の減少や活動の停滞を防ぐための新しい知識や刺激の確保といったことを考えると、一定程度的新陳代謝があることが望ましい。筆者の参加した第32回の「本のカフェ」でもその半分以上は新規の参加者であったように、まだそれほど年数が経っていないとはいえ「本のカフェ」では新規の参加者を継続的に獲得できている。読書会を含めたイベントやコミュニティで、どうすれば参加者の固定化を防ぎ、新規の参加者を獲得できるかという点は重要な論点である。

第二に、地域によりイベントに求められることの違いである。既に述べたように、「本のカフェ」は札幌および東京の2都市で開催されているが、同じ主催者が同じような形式で読書会を開催してもその性格は異なるものとなる。地域やそこに集まる人の特徴によって、イベントに求められることやそこで開催されるイベントの特徴は異なってくる。地域によってどのようにニーズが異なりその結果どのようなイベントとなるのか、また、イベントの主催者側から見ればどのようにニーズを汲み取りそこに応えていくか、といったことを明らかにしていく必要がある。

第三に、地域におけるイベントとコミュニ

ティの関係である。本稿の冒頭で、カフェをサードプレイスとして機能させるためにはカフェにおいて活発な会話がなされることが必要であり、そのために何らかの仕掛けやイベントが必要であると説いた。しかし、カフェで開かれる読書会のようなイベントで会話が生み出されれば、すぐに地域に根付いたコミュニティに結びつくわけではない。北條(2014)では、いくつかの読書会を紹介して読書会のサードプレイスとしての側面があることを主張している。しかし、Ordenburg(1989)のいうサードプレイスは地域社会に深く根付いていたものである。人が集まるイベントを行いそこで交流があることが、直接に地域コミュニティの形成に結びつくとは限らない。地域コミュニティの再生を考える上で、この懸隔をいかに埋めるかは検討すべき重要な課題である。

(わかばやし たかひさ・本学地域政策学部講師)

【謝辞】

快くヒアリングに応じてくださった「本のカフェ」主催者の木村洋平氏に心より御礼申し上げます。また、筆者が「本のカフェ」に参加した際の参加者に心より感謝申し上げます。なお、本研究は、平成28年度高崎経済大学競争的研究費・特別研究助成金およびJSPS科研費26885061および16K17173の助成を受けております。

【注】

- 1) 日本の喫茶店を含めたサードプレイスに関する論考としては、Oldenburg(1989)の邦訳書におけるマイク・モラスキーによる解説も参照のこと。
- 2) カフェを人々の交流の場としている事例や方法については山納(2007, 2016)を参照のこと。
- 3) 本節における「本のカフェ」の説明は、主宰

者の木村洋平氏のブログ「本の吟遊詩人」(<http://idea-writer.blogspot.jp/>) の内容および木村洋平氏への2016年3月から4月にかけて行った対面およびメールでのインタビューに基づいている。以下、「本の吟遊詩人」に限らず引用したウェブページの閲覧はすべて2016年9月15日に行っている。

- 4) 37回の「本のカフェ」の開催場所は、カフェやそのイベントスペースを中心に16か所に及んでいる。
- 5) ビッグイシューは1991年にロンドンで生まれ、日本版は2003年に創刊された雑誌であり、ホームレスの人に仕事を提供し自立を支援する事業である。ビッグイシュー日本版については<http://www.bigissue.jp/>を参照のこと。また、「本の吟遊詩人」にもビッグイシューに関するQ&Aが掲載されている (<http://idea-writer.blogspot.jp/2015/05/q.html>, http://idea-writer.blogspot.jp/2015/05/q_30.html)。
- 6) 「本のカフェ」が検索で上位に出てくる理由としては、「本の吟遊詩人」における各回の告知やレポートの更新頻度が高く文字数も多いことが挙げられる。また、その他の読書会の多くがインターネット上でオープンな情報発信を行っているということもある。
- 7) 本のカフェ「オープン・ポリシー」http://idea-writer.blogspot.jp/2015/06/blog-post_20.html。
- 8) 本のカフェ「安心ルール」http://idea-writer.blogspot.jp/2016/03/blog-post_15.html。
- 9) 本稿で取り上げた2回を含めて、毎回の「本のカフェ」の様子については「本の吟遊詩人」にて紹介されている。
- 10) 『羊飼いの指輪』の巻末の関口英子氏による解説で述べられている通り、子どもたちとスタジ

オで話し合いながら物語の結末を考えたというラジオ番組が本書のもととなっており、そのためそれぞれの話に3つの結末が用意されているという形式になっている。既に結末が用意されているという点では、自由に物語の結末を想像・創造させるというもとのラジオ番組の趣旨には十分になっていないことには注意を要する。

〔参考文献〕

- 広井良典『コミュニティを問いなおす：つながり・都市・日本社会の未来』、筑摩書房、2009年。
- 北條一浩「教養、遊び心を求めて参加する“第三の場所”」、『エコノミスト』第93巻第1号、2014年。
- 伊豫谷登士翁・吉原直樹・齋藤純一『コミュニティを再考する』、平凡社、2013年。
- Ordenburg, Ray (1989) . The great good place : Cafés, coffee shops, bookstores, bars, hair salons and other hangouts at the heart of a community, Da Capo Press. 邦訳、レイ・オルデンバーグ『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』（第2版の訳）、忠平美幸 訳、みすず書房、2013年。
- Putnam, Robert D. (2000) . Bowling alone : The collapse and revival of American community, Simon & Schuster. 邦訳、ロバート・D・パトナム『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』、柴内康文 訳、柏書房、2006年。
- 山納洋『common cafe：人と人が出会おう場のつくりかた』、西日本出版社、2007年。
- 山納洋『つながるカフェ：コミュニティの〈場〉をつくる方法』、学芸出版社、2016年。
- 山崎亮『コミュニティデザインの時代：自分たちで「まち」をつくる』、中央公論新社、2012年。